

高橋二三

にいさん

ママは フエニックス 不死鳥



ママは不死鳥

高橋二三

講談社

〈著者略歴〉

●大正15年2月3日，群馬県生まれ。脚本家。
昭和23年，麗沢大学中国語科中退。昭和21年，
サン写真新聞推理小説懸賞募集に『ダンスホ
ール殺人事件』で当選。昭和23年，松竹大船
撮影所シナリオ学校入学，昭和25年，シナリ
オ作家協会第1回新人シナリオ・コンクール
に『ミスター警官』で当選。以来，映画脚本
82本，テレビ脚本無数執筆。

ママは不死鳥^{フエニフタス}

1983年4月30日 第1刷発行

著者——高橋二三^{にいさん}

定価——980円

© Niisan Takahashi 1983 Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 〒112

電話東京 03-945-1111（大代表） 振替東京 8-3930

装幀——山岸義明

印刷所——豊国印刷株式会社

製本所——黒柳製本株式会社

●——落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取替えます。

ISBN4-06-200547-6（0）（学2）

献 辞

ほとんどが一面識もなかった見知らぬ人たちばかりの、左記の三十二名の方々へ、心からなる感謝をこめて、この本を捧げます。(順不同。敬称を略させていただきます)

- ・ 普川浩、林幸子、青山京子、長谷川彬子、関口京子
- ・ 坂場厚志、川田由起江、真野理恵子、森永正広、永田忠彦
- ・ 京俊司、葛井令子、沼尻ゆみ子、角田香、高坂和子、高坂昭子、筒井粒、五藤寅次郎、出浦秀彦、飯沼武、長谷川麻子、清水英子、山本裕
- ・ シスター酒向、長谷川貴子、平田幸子、中村恵理香、平井信彦
- ・ 白石真一、島田収、どうしても名の知れぬもう一人の青年
- ・ 永井鴻

目次

序	9
---	---

第一章	ラストシーン	17
-----	--------	----

十三日の金曜日	19
---------	----

二度めの電話	24
--------	----

母なき子、父なき子	29
-----------	----

病院始まって以来五人めの奇病	34
----------------	----

ラストシーンを変えた娘	40
-------------	----

第二章	「ママは廃人28号」	53
-----	------------	----

五年めのシンクス	55
----------	----

おそばがこわい	63
---------	----

救命救急センター	71
----------	----

ママの名を呼べども 76

第三章 ファローの子……………87

魚 断 ち 89

ファロー四徴と脳膿瘍の関係 92

第四章 子育て教育……………101

けんか教育 103

オンボロ背広と結婚指輪 109

第五章 バカンスは病室で……………115

カレンダー・グラフ 117

母 の 声 117

イエスとノーの進歩段階 118

エクソシストごっこ 120

知らない人、オレという人 125

第六章

気管と食道の混線	128
仮免はもらったが	131
ママは宇宙人？	133
深夜の儀式	135
二人部屋へ	139
テキベン	142
クサイワネ	143
ゴルフ断ち	148
弁当運搬人	149
柄の長いスプーン	153
退院への道	155
クリスマスとエイプリルフル	159
退院資格証明証	161
ささやかなラッキー	163
メリー・クリスマス	165

第七章

ママの名言集

181

入院室での三カ日 168

奇跡の人 170

土曜日は友情弁当デー 173

エイプリルフール 176

夕食のつどい 183

お辞儀が背中へつつかえた 185

入浴の儀式 188

音階が違イマス 189

ジャガイモデゴザル 190

ナカノダス 192

娘たちの名言集 194

第八章

幻の銀婚式

197

イツシヨデ、ナイ 199

第九章

祈れ 祈れ ! 243

盗んできたプレゼント 202
シジツ、ウケル? 206
「アオゾ ラライノル」 209
ママは吸血鬼? 212
イッショデ、ナクナイ 217
見知らぬ人たち 220
深夜の祈り 237

クリスマスイウに 245

第十章

いちばん勁い人 249

人生の大晦日 252

ママのための喪服 256

生命の代価 262

入信の秘密 265

いつもイッシヨ

271

あとがき

.....

273

装幀 山岸義明

序

「身障者手帳がもらえそうだよ」

わたしがそう告げると、妻はまるで新しい玩具のプレゼントでも約束された幼児のように、無邪気な笑顔を浮かべる。

身障者手帳とは、身心に障害があつて日常生活を人並みに送れない者へ、市町村役場の福祉課から交付されて、その障害の度合により、医療費を免除されたり、生活保護を受けたり、無税の特典などが、この手帳で保証される。

もちろん、専門医の診断と福祉課の厳重な資格審査を経なければ、交付されない。

冷たい表現をするならば、この手帳を交付されるということは「欠陥人間」の判定を受けたことに等しい。

決して、喜ぶべき境遇ではない。

だが、五十歳になるわが妻は、底ぬけに明るい笑顔で、この事態を受けとめている。

専門医から資格審査のための診断の時、

「買い物など、出かけているの？」

と問われると、彼女は得意そうに、

「エエ……」

と、自信をもって答え、危うく「受給資格無し」と判定されるところだった。

十年間に二度の脳手術の結果、後遺症の失語症で、幼稚園児程度にしかしゃべれない彼女は、人からの問いかけに対し、「イエス」とか「ノオ」の大まかな返答しかできない。

状況を細かく説明することなど、およびもつかないのだ。

五十歳になる一家の主婦として、買い物に出かけるような日常生活をいとなめるのか？ という質問に対し、彼女は自信をもってうなずいているが、さて、その現状は……

わが家から、いちばん近いスーパーマーケットまで、大人の足で約五分である。

リハビリテーション（病後の回復促進治療）のために、少しでも歩かせたいのと、たった一人で留守番をさせておくといつ痙攣^{けいれん}の発作（いわゆるてんかん。これも脳手術の後遺症の一つ）が起ころかしないので、わたしが三度の食事のための買い出しに出かける時は、なるべく、彼女を散歩がてら、連れ出すことにしている。

その時、わたしは必ず自転車を押してゆく。

心臓に先天的な欠陥があり、二階への階段を登るだけで息切れがして、チアノーゼで唇が紫色になり、うずくまってしまうような彼女が、街の真ん中で歩き疲れてうずくまりたくなった時に、自転車がものをいう。

乗せて帰れるからだ。

さて、ゆっくり歩いてたどりついたスーパーで、わたしが立てた献立に従って買い物をして
いる時に、彼女はある売り場でキラキラとひとみを輝かせ、足をとめて「コレ！ ……コレ！」
と指さす。それを買えというのだ。

それは決まって、娘二人が好物のフルーツバイである。わたしがうなずくと、彼女は勝ち
誇ったようにバイを取る。

まさに、買い物^々をしているのだ。

翌日。また同じスーパーの同じバイの前でひとみをキラキラと輝かせて「コレ！ ……コレ！」と、バイを指さす。

だが、それは昨日買ったばかりで、

「まだ、半分以上も残っているよ」

わたしのその言葉に、彼女は一瞬、残念そうな顔になる。

さらにまたその翌日、同じスーパーの同じバイの前で、彼女はひとみを輝かせて「コレ！

……コレ！」

まだ買う必要がないほど、残っているのだ。同じものをいつもいつも彼女の注文によって買いととのえておくので、娘たちもさすがに持て余しきみで、なかなか減らないのである。

このようなありさまでも、人から「買い物にいつているの？」と問われれば、得意そうに「エエ！」と答える彼女なのだ。

右半身不随の後遺症はほぼ完治した彼女の手先をさらによく動かせるようにするために、果物の皮をむく程度のごく軽い作業は、なるべくさせなければならぬ。

彼女も、仕事を命ぜられると、喜ぶ。

家族全員の注視を浴びつつ皮をむくような時のみ、彼女は完全に一家の主婦の座にいて、ことを、自覚できるからだろうか。

ある時、リンゴが二個しかなかった。

彼女は果物を六つ割りにするのが好みである。二個を六つ割りにして、十二切れを四人で食べることになる。

「ママ、一人でいくつ食べられる？」

彼女はその問いに、無言で肩をすくめるようなしぐさをする。ふざけているわけではない。ほんとうにわからないのだ。

「じゃ、もっと問題を簡単にするよ。一つのリンゴを六つに割る。リンゴは、二個ある。さあ、合計、なん切れできる？」

「……………」

感情の起伏の激しい次女が、正面から母をみつめて、

「ママッ、六掛ける二は？」

「……………」

おっとりしたタイプ of 長女が、ゆっくりと、

「掛け算は無理よ。ママ、六プラス六は？」

家族三人が、答えを期待して、ママの口もとを、ひたとみつめる。

ママは天使のように無邪気な顔で、

「……………ワカラナイ」

そんな彼女が、二度めの脳手術であらゆる記憶を失い、言葉を失い、ベッドの上でただ生きているだけの植物人間になってから、ほぼ二年たって、お買い物、にゆけるようになったこ

ろ、ある日、不意に、いい出した。

「シジツ……ウケル？」

脳の病気は、後遺症こそこのこっているが、もはや手術の必要はなく、いつものことだが彼女の言葉は唐突すぎて理解に苦しむ。

が、彼女のいわんとするところは、心臓の手術であることが、押し問答の末にわかった。

そもそも、二度の脳手術は、すべて心臓の先天的欠陥が原因で（この関係については後述）将来、いつ三度めの脳手術をしなければなくなるか、神のみぞ知る、なのだ。

つまり、生きている限り、彼女は時限爆弾を永久に抱き続ける身の上なのである。

だが、その元を断つために、心臓の手術をするには年を取りすぎていて、危険が伴うらしい。

「もしかしたら、手術の結果、死ぬかもしれない」

わたしのその言葉に、彼女は明るくうなずいて、

「……ばばガ……ラクニナル」

その意味を解説するのに、また押し問答が始まって、次のような彼女の真意がわかった。

ひどい亭主関白で、横のものを縦にもしないものぐさなわたしが、彼女の二度めの脳手術以来、三百六十五日、朝六時に起きて次女のために弁当作りを続けている。わたしは生活革命を